

GO! GO!

'Tis impossible to love and to be wise.

実践研究

岩手県立前沢明峰支援学校
研究集録

平成24年12月25日発行

16号

テーマ

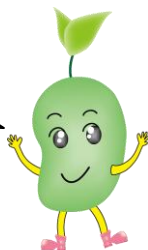
児童生徒一人一人の生きがいのある 豊かな生活を目指して

～学年、学部、社会をつなぐ取り組み～

研究

- 小学部：児童生徒一人一人の力を積み重ね、
将来の自立へつなぐための系統的支援
～基本的な生活習慣の確立をめざして～
- 中学部：生きがいのある豊かな生活を実現するために
中学部段階での授業はどうあればよいか
- 高等部：主体的な社会参加を目指した取り組み
～組織的、系統的な支援の取り組み～
- 寄宿舎：卒業後の豊かな生活をめざした支援について
～地域生活につなげる支援のあり方～

学校マスコットの
「こまめ」です。
私がお案内します。



すくすく『こまめ』です

リレーコラム

- 私の「つなぐ」

目次

1	はじめに
2	全体研究
4	小学部研究
8	中学部研究
12	高等部研究
16	寄宿舍研究
21	リレーコラム 私の「つなぐ」 「つなぐ」ために必要なこと
26	あとがき

はじめに

校長 菅原 清



三年次研究といっても過ぎてしまえば早いものです。前回に取り組んだ研究のまとめでは、学習内容及び指導方法において、生活年齢の考慮不足や学習内容の系統性、学部間の系統性・関連性の希薄さが課題としてあげられました。そこで、平成22年度から24年度までの三年間の研究では、学年、学部、社会を「つなぐ」をキーワードに研究に取り組み、ここに研究集録の発行の運びとなりました。

前回の研究成果や研究推進の改善点などの振り返りから、「児童生徒一人一人の生きがいのある豊かな生活を目指して」の研究テーマのもと、キャリア教育の視点で教育活動全体を見直すこと、発達段階や実態に応じた指導内容であること、在学中や卒業後の生活を見通した支援であることをポイントに、学年、学部、社会をつなぐ取り組みの研究を実践してきました。

「つなぐ」ための具体的な取組として、授業研究会をはじめ学部情報交換会、学部異動職員アンケートの実施、他学部体験研修を実施しました。全体研究会では、ワークショップ型の研究会を取り入れ、多くの意見を基にした研究協議は、少ない時間の中で効果的な研究協議ができたものと思っています。

これらの様々な工夫を段階的に進めることで、着実かつ効果的な研究を行うことができ、教職員の理解が深まったものと確信しています。実践研究部を先頭に、全職員で知恵を絞り連携して進めてきた三年間の成果をしっかりと検証し、これからの研究への足がかりにしていきたいと思っています。

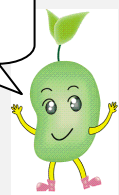
今次の研究を進めるにあたっては、多くの皆様からご指導ご助言をいただきました。特に、秋田大学教授の内海淳先生には、三年間にわたりご指導をいただきました。未熟な私たちに懇切丁寧にご指導いただいたことに、心から感謝とお礼を申し上げます。また、最終年度となった平成24年度は、県教育委員会学校教育室主任指導主事の清水利幸先生にもご指導いただきました。研究をまとめるにあたっての適切なご指導ご助言に心から感謝申し上げます。

本校では、今後も特別支援教育の推進に向け、社会の状況や子ども達の実態を十分に把握し、将来を見据えた本校らしい実践的な研究を進めていきたいと考えています。

今回の研究集録をご覧になった皆様にも、多くのご意見・感想をいただき、今後の教育活動に活かして行きたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

全体研究

児童生徒一人一人の生きがいのある豊かな生活を目指して ～学年、学部、社会をつなぐ取り組み～



キーワードは
「つなぐ」

一 はじめに

本校では、「児童生徒一人一人が個性と能力を発揮し、可能性を最大限に高め、自立・主体的な生活を送る」を学校教育目標として日々の教育活動を行っている。

平成十九年度からの三年間は、「一人一人のニーズに応じた自立的主体的な活動をするための支援はどのようあるべきか」～授業・寄宿舎生活から家庭、関係機関、地域社会へ～のテーマで研究を推進した。その結果、学校・寄宿舎・学園・家庭・進路先との連携の在り方や個別の教育支援計画、個別の指導計画の妥当性について検証することができた。その中で次の課題として、児童生徒の生活年齢をより考慮することや、学部間の系統性・関連性を更に深めることの必要性が挙げられた。そして、これらの課題を達成するた

めにキャリア教育の視点を取り入れることが有効ではないかと思われた。それは、キャリア教育においては、現在の教育活動を「将来を見通した支援」や「豊かな生活の実現」という視点で見直し、「学年間の学習や学部間の学習」をつなぐ、「学校生活と地域生活」をつなぐ、「学校生活と職業生活」をつなぐことが大切だとされているからである。そこで本研究では、「つなぐ」をキーワードに、児童生徒一人一人の生きがいのある豊かな生活を目指したいと考え、本研究テーマを設定した。

二 研究仮説

キャリア教育の視点を生かした授業づくりを行うことで、学部間の系統性・関連性が深まり、児童生徒一人一人の生きがいのある豊かな生活を実現できるのではないか。

三 研究内容

本研究は三年次計画で、以下の内容に取り組む。

1 キャリア教育の理解推進と学部間の情報交換の推進

(1) 研修会の実施や、情報誌の発行を行い、キャリア教育についての共通理解を図る。

(2) 目指す生徒像(学校教育目標)を全職員で確認する。

(3) 他学部理解を進めるため、他学部体験研修や情報交換会を行う。

2 キャリア教育の視点を生かした授業づくり

(1) キャリア教育発達段階表(東京都二〇〇九)を参考にし、学習内容の見直しや授業づくりを行う。

(2) 授業研究会を行い、キャリア教育の視点から協議を行う。

3 各学部ごとの研究

(1) 各学部ごとにテーマを設け、学部の特色や課題点を見据えた研究を進める。

四 成果と課題

1 キャリア教育の理解推進について

研修会の開催や情報誌の作成をすることで、その視点やこれまでの教育活動との違いについて理解が進んだ。目指す生徒像を確認し、キャリア教育で具体的に何をするのかを共通理解することで、学校全体で取り組むという意識が高まった。

しかし、キャリア教育に関する様々な情報に対して混乱や誤解がある点や、保護者の理解をどう進めていくかといった点が課題でもある。

2 学部間の情報交換の推進について

授業研究会でのグループ討議や、学部研究についての情報交換会の設定により、充実してきた。また、他学部体験研修では、実際に他学部の授業に参加することで、取り組みや

雰囲気を知る機会となった。加えて、医療的ケア対象児童生徒についての情報交換機会として、ケアルームへ行く週間を実施し、各職員の所属学部以外の学部への理解を深めた。さらに、学部異動者に対して、学部間のつながりやギャップについてのアンケート調査を実施し、今後の課題を集約することができた。

課題としては、参加する職員が多忙感を感じないように研修の設定することが挙げられる。

3 キャリア教育の視点を生かした授業づくりについて

個別の教育支援計画や個別の指導計画に、キャリア教育発達段階表を基にしたキャリア教育の視点を取り入れることで、現在の学習内容がキャリア発達のどの段階にあるのかを確認したり、領域や能力のバランスがどうなっているのかを確認することにつながった。一方で、キャリア教育発達段階表における領域や能力の表記をそのまま参考にするだけでは、授業への反映が難しいという点も明らかになり、児童生徒に合わせた

具体化やモデルステップ化が必要であると考えられた。

授業研究会においては、全職員が「つながり」というキーワードを強く意識するようになり、自分の所属学部から他学部に向けての意見が多く出されるようになった。

4 各学部ごとの研究について

小学部は、進路先からの意見を受けて基本的な生活習慣の確立を、中学部は、生徒の主体性を引き出す授業を、高等部は生徒の「つり」を生かすという視点での作業学習を、寄宿舎はより良い支援を目指した取り組みにそれぞれ取り組んだ。テーマに学部の特色を出しつつも、キャリア教育の視点である「一人一人の発達段階や実態に応じて、卒業後の生活や在学中の生活を見通した支援を行っているか」⁽¹⁾を共通に意識しながら進められたことが何よりの成果である。

【文献】

(1) 岩手県立総合教育センター特別支援教育室(2008)「特別支援教育(知的)キャリア教育推進ガイドブック」

児童生徒一人一人の力を積み重ね、将来の自立へつなぐための系統的支援

基本的生活習慣の確立をめざして

一 はじめに

小学部では、平成十九年度から平成二十一年度において、「生活単元学習の集団化と個別化をめざして」一人一人のできる状況作り・支援の最適化」の研究テーマのもと、集団での活動における一人一人に最適な支援のあり方、またそのための環境設定を中心に研究を行った。

その結果、発達段階に応じた支援ツールの作成や授業における環境設定の吟味が進み、児童の自立的・主体的な姿が増えた。しかし、その反面、小学部として取り組むべき事項や達成することが期待される目標が明確化されていない、という課題の声も上がった。そこで、児童の実態や発達段階に応じた基本的生活習慣の確立をめざした支援について平成二十二年度から取り組むことにした。

二 研究内容

社会人として働く姿や地域で生活する児童の姿を考えたときに、身に付けておかなければいけない力は様々ある。その力は小学部段階から着実に積み重ね、中学部、高等部へとつなげていく必要がある。特に小学部段階では、基本的生活習慣を確実に身に付ける時期でもあり、他学部からもその必要性が指摘されている。

そこで、小学部では、児童の将来の自立に向けて、基本的生活習慣の確立を目指す取り組みを行った。

〈一 年次の実践〉

- 1 小学部段階で身に付ける力の明確化
 - (1) 基本的生活習慣チェック表の作成
 - (2) 身に付けるべき基本的生活習慣につ

〈二 年次の実践〉

- 2 低・中・高学年のつながりの意識化
 - (1) 他学年とのつながりを意識するため授業を見合う会の実施
 - 3 児童の意欲喚起
 - (1) 将来こつであってほしい姿
 - (2) 目標や手立てについて他学部職員より意見をもらおう学部情報交換会の活用
- 2 学部内での一貫した支援
- (1) 排泄、衛生、着脱グループごとに検討した手立てについて学部研究会で共有

(1) 頑張っている児童やできるようになってきた児童の「ステキなすがた」の掲示

〈三年次の実践〉

「願う姿」をもとに、一人一項目について家庭等と連携を図り支援をすることにした。

- 1 「願う姿」のまとめと周知
- (2) 食事、排泄、着脱、衛生の四項目について吟味し、学部研究会で共通理解
- (3) 「願う姿」を家庭、学園、送迎サービス等関係機関に配布し周知
- 2 家庭等と連携した支援
- (1) 一人一項目連携する内容を決め、どこでも一貫した支援の継続
- (2) 連携内容を「がんばりすがた」として

掲示

三 成果と課題

研究の成果としては以下の五点が挙げられる。

- 1 「願う姿」や手立ての共有をしたことで、担当の児童だけでなく、他学年の児童にも

目を向けて支援することができた。

- 2 他学部の意見を取り入れたことで、将来へのつながりを意識できた。

- 3 排泄や手洗いなど、毎日意識して取り組むことで、習慣の確立に向かうことができた。

- 4 「願う姿」からポイントを絞って連携を図ったため、家庭や学園、放課後デイサービスで共通の支援を進めることができた。
- 5 児童によっては、「願う姿」以外にも伸びた部分があったり、家庭等と「願う姿」以外にも連携が進んだ部分があったりした。

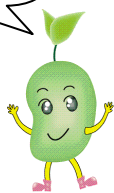
しかし、まだ基本的な生活習慣の確立とまでは至っていないのが現状である。今回、小学部として将来こうであってほしい姿、「願う姿」を確認し、支援ツールや手順などの手立てを共有・活用した。そして、学校だけでなく家庭・学園・放課後デイサービス等と連携して取り組むことができた。

基本的な生活習慣の確立には、学校だけでなく家庭等の協力が必要である。連携先によってはなかなかうまく進められないこともあ

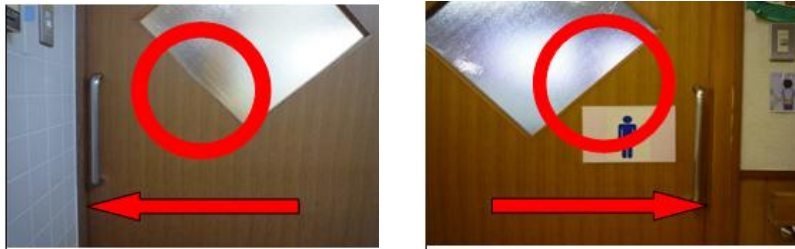
ったが、学校で挑戦・検証し成功例を積み重ねて支援の成功例を伝え働きかけていくことは大事である。また、お互いに困っていることからの連携であるとスムーズに進められることが分かった。児童の実態や連携先の状況に合わせ、今後も支援ツールを活用しながら、どの人とても、どの場所でもできるように一貫した支援をしていきたい。

また、将来の自立につながるために、学部内や家庭等と共通した支援はもちろん、中学部・高等部、社会へとつながりいけるように横と縦のつながりをしっかり行っていくことが重要だと思われる。写真やビデオを活用して具体的に伝えたり、より良い支援の方法を話し合ったりすることで児童が確実に身に付けることができるようさらに取り組んでいく必要がある。

キーワードは
「支援の共有」



排泄グループ



ドアを しめます

ドアを しめます

ドア閉めカード

(トイレの内側、外側のドアに設置)

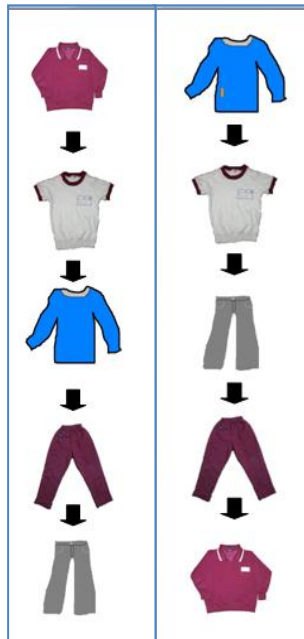
着脱グループ



すそをいれます。

裾入れカード

(トイレ内に設置
各学級にも配布)



着替える順番カード

(各学級に配布)

衛生グループ



手洗い順番カード

(各学級流し、トイレ、
食堂に設置)

〈2年次 (平成23年度)〉

排泄、衛生、着脱グループごとの
支援ツールの作成と共有



歯磨き DVD

(各学級に配布)

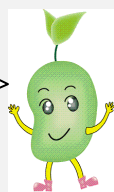
小学部 A年 「願う姿」連携記録シート

〈3年次（平成24年度）〉
家庭等との連携記録シートの活用

No	名前	項目	願う姿	支援の方法	連携先	連携の実際	成果・課題
1	A	排泄	トイレで排尿する習慣を身につける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定時にトイレへ促し、座位または立位で排尿する。 ・ 一人でズボン等を上げ下げするよう声掛け等で動作のきっかけを伝える。 	家庭 ひだまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭へは毎日連絡帳で排泄状況を情報交換したり、取り組み方について相談し合ったりして進めている。 ・ ひだまりへは毎日の送迎時に口頭で情報交換を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校では定時排泄の成功回数が増えてきた。天候や水分摂取の状況にもよるが、学校にいる間は布パンツで失敗無く過ごせた日が増えてきた。 ・ 家庭でもトイレでの成功回数が増えてきた様子。
2	B	着脱	前後正しく立位で着替えをすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前後の目印となるもの（絵柄やネーム等）を確認する。 ・ 無地の肌着等目印が分かりにくいものは、裾にマークを付ける。 	たばしね 学園	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年度初めに着脱に関する取り組みについて共通理解を図り、その後は連絡帳や口頭で変容について情報を伝え合うようにしている。 ・ 肌着等目印が分かりにくい衣服については学園担当者にマークをつけてもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 衣服の前後は自分で確認して正しく着られるようになってきた。 ・ 時々声掛けを受けることはあるが、立位の着替えにも少しずつ慣れてきた様子で意識して取り組んでいる。
3	C	食事	いろいろな食材や飲み物を受け入れられるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べやすいように細かく刻んで提供する。 ・ 飲み物はコップに少量ずつ入れて飲むようにする。 	家庭 ひだまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭へは連絡帳で食事状況を毎日伝えている。特に変化が見られてきた時は、具体的なコメントを添えて、家庭での取り組みを促している。 ・ 保護者からの情報は面談などの機会に直接口頭で話を聞いている。 ・ ひだまりとは時に口頭で情報交換を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の給食は毎日ほぼ完食している。 ・ 苦手な牛乳や茶、水も一口分ずつコップに入れることで、抵抗なく飲めるようになってきた。 ・ 学校での様子を受けて、家庭やひだまりでも同じように取り組んだことで食べる食材や飲み物が増えてきた。
4	D	着脱	衣服の前後を間違えずに着替えができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ そのまま着られるように、背中からたたむようにする。 ・ 柄や目印を確認するようにする。（分かりにくいものにはマークをつける） 	家庭 金ヶ崎 クレヨン (10/2~)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭へは口頭で、または連絡帳で状況を情報交換したり、取り組み方について相談したりして進めている。 ・ 放課後支援の状況については情報収集中である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 衣服の柄を見て前後を判断できるようになってきている。 ・ なかなか協力を得難いところもあるが、協力していただけたところを評価しながら連携を図ろうとしている。

生きがいのある豊かな生活を実現するために

中学部段階での授業はどのような形であればよいか



キーワードは
「意欲」
「主体性」

一 はじめに

中学部では、平成十九～二十一年度まで「生徒一人一人がより自立的主体的に活動できるための支援の在り方について」を研究テーマとし、生活単元学習の授業づくりを中心に研究を進めた。その結果、授業設定・教材教具の工夫・評価の仕方等について有効な支援の在り方が明らかになってきた。一方、課題として、生活年齢の考慮、他学部との系統性・関連性が薄いことがあげられた。

二 研究内容

中学部では、これまで研究してきた指導方法の追求に加えて、生活年齢や学部間の系統性・関連性を考慮した授業づくりを中心に研究を進めることとした。この具体的な視点として、「キャリア発達段階表（東京都二〇〇

九）」を参考にした。

授業づくりについては、学部の全生徒・教員が関わっていること、実態の異なる生徒による班編制で行われることから、学部全体で取り組みやすい生活単元学習（作業単元資料①）を取り上げ、学部研究会、学部情報交換会、全体研究会の中で授業研究を行った。

〈一年次の実践〉
1 授業づくり

- (1) 授業研究会 クッキー班
テーマ「主体性」「意欲」「達成感」
- (2) 「作業単元の目的」についての確認。

〈二年次の実践〉

1 授業づくり
一年次の実践より、作業単元では、「働く（活動する）喜び」「や」「意欲」を育てることが重要であるということなどを学部共通のものとして確認し、授業づくりを進めた。

(1) 授業研究会Ⅰ 木工班

テーマ「あいさつ」

(2) 授業研究会Ⅱ 紙工班

テーマ「自分の役割を果たす」

(3) 作業単元における「目指す姿」「必要な支援」の検討。

2 「つなぐ」ための取り組み

- (1) 作業評価表の中に「キャリア教育における個別の重点目標」欄の追加（担任と作業担当とのつながり）。（資料②）
- (2) 各作業班を見学する機会の設定（作業班同士のつながり）。

〈三年次の実践〉

1 授業づくり
一年次の実践より、作業単元では、「主体的に活動する姿」「意欲的に活動する姿」を目指していくことを学部共通のものとして確認し、授業づくりを進めた。

(1) 授業研究会 手芸班

テーマ「役割」「返事・報告・依頼や相談」(巻末支援案参照)

(2) 作業単元における「育てたい力」についての検討。

2 「つなぐ」ための取り組み

二年次の実践に加えて、担任と作業担当者との情報交換会を設定した。

三 成果と課題

1 授業づくりについて

成果

「目指す姿」に加えて、「育てたい力」についても検討を行い、「役割を果たす」力が最も重要であり、併せて、「あいさつや返事をする【】報告、相談や依頼をする【】等の力も重要である」ということを、学部共通のものとして確認した。

支援のポイントとしては、以下の三点を確認した。

- (1) 生徒が主体的に動くことができる役割の設定、教材・教具の工夫、環境整備。
- (2) 個々の生徒の実態に応じた活動の質

や量の吟味、支援の方法・程度の共通理解。

解。

(3) 生徒の活動する過程を認め、励まし、称賛する事を基本とする教師の関わり。

また、授業の中で以下のような生徒の姿を見ることができた。

(1) 主体的・意欲的に活動する姿。

(2) 道具の位置等を自分で工夫する姿。

(3) 新しい作業やより難しい作業に挑戦しようとする姿、失敗や間違いがあっても再チャレンジする姿。

(4) 生徒同士で声を掛け合う、褒め合う姿。

課題

(1) 作業への意味付け・価値付けの方法の検討。

(2) 将来へのイメージを持ち、なぜ仕事をするのかを理解できる支援方法の検討。

2 「つなぐ」ための取り組みについて

成果

(1) 生徒についての共通理解が深まり、より具体的な支援方法を検討できた。

(2) 自分の担当する作業班以外の活動内容や支援方法を知ることができた。

課題

作業の評価表をより活用しやすいものにするために、記入の仕方を職員間で統一し共通理解を図る必要がある。

(1) 系統性・関連性についての考察

中学部では、授業の中での生徒の変化を自己肯定感が高められてきた結果と捉え、中学部段階の授業の中で大切にすべきこととして以下の二点を確認した。

ア 自己肯定感を高めながら、小学部で身に付けた「出来ること」をさらに増やしていくこと。

イ 主体的に活動する事で、生徒自身が出来るための手がかりを得ること。

また、このような授業づくりが、中学部卒業後も、様々なことに挑戦する姿、挫折を乗り越えていく力につながっていくのではないかとこの見解が出された。

本研究は、作業単元に視点を絞って行ったが、限られた学習場面でのみ、キャリア教育の全ての視点を取り入れていくことは難しく、この学習場面での視点をねらいとするかを検討していくことが今後の課題である。

H24 年度中学部生活単元学習「作業生単」の概要

1 作業班の編制と主な作業内容

作業班	主な作業内容	生徒
クッキー班	クッキーづくりを、「生地作り」、「形作り」、「計量・焼き」の3つのグループに分かれて進めている。全員が工程を分担してクッキーを作る活動を通して、自分の役割を果たそうとする力や、班の仲間と協力して作業する態度を身に付けて欲しいと考えて行っている。	11名
木工班	キューブ、椅子、花台等を、生徒の希望を考慮しながら、その都度、工程を分担して進めている。生徒が自分のやりたい工程を選択・決定することで最後まで集中して取り組む姿勢につなげ、様々な工程を経験することで、自分の良さや苦手なことが分かって欲しいと考えて行っている（自己理解）。また、先輩が後輩へ教える機会を作ることで、後輩が次年度の自分の役割に対して見通しを持つこともねらいとしている。	10名
紙工班	手すき和紙を利用した張り子のだるま等を、「紙ちぎり班」、「紙はり班」、「紙すき班」の3つに分かれて進めている。役割を、個々の生徒の多様な個性を生かすものとして捉え、作業を進めている。わかりやすい道具の配置と動きやすい環境整備を行うことで、生徒が主体的に役割を果たす姿を引き出すことをねらいとしている。	13名
手芸班	ビーズ班（ペットボトルビーズを利用した製品作り）、アイニット班（アクリルたわしづくり）、刺し子班（刺し子の布巾づくり）の3つの班に分かれて進めている。生徒の実態や興味関心を考慮した作業内容を設定することで、より主体的に作業内容や係活動（役割）に取り組む姿を引き出すことをねらいとしている。	15名

2 期間と作業時間

	期 間	時 間(作業開始～終了時刻)
第1回	6月 4日(月)～ 6月29日(金)	3、4時間目(10:30～11:45)
第2回	11月12日(月)～11月22日(木)	2、3、4時間目(9:50～11:45)
	校内実習 11月26日(月)～12月7日(金)	終日(9:00～14:20)
第3回	1月28日(月)～ 2月15日(金)	3、4時間目(10:30～11:45)

平成〇〇年度 全体作業・校内実習の評価

中学部 〇年 氏名 〇〇 〇〇		作業班 〇〇班		
キャリア教育における個別の重点目標				
・作業の手順が分かり、自主的に作業をする。 ・挨拶、返事、報告を自主的にする。		担任が記入：「キャリア発達段階表（東京都 2009）」を参考にする。		
前 期	作業に関する個別の重点目標	作業内容 ・製材 ・切断 ・組み立て	指導の手立て ・視覚的な支援を活用し、手順が分かるようにする。 ・グループでの活動にし、仕事をローテーションで分担することでお互いの仕事内容に気付かせるとともに、協力しないと作れない状況に設定する。 ・指示は一つずつ、簡潔にする。 ・木工班の挨拶、返事、報告の仕方を学び、習慣にする。	評価 ○ ◎
	作業担当者が記入：「キャリア教育におけるこの重点目標」に準じて、担任と相談をしながら設定・記入する。			
	<活動の様子> ・木工で使用する機械類の大きな音が怖く耳を塞ぐことが多くありましたが、安全に注意して繰り返し使用することで全く見られなくなりました。 ・椅子を作りでは、製材、切断、組み立てを担当しグループのメンバーと協力して作業ができました。ドライバーの先をネジに対して垂直にして打ち込むことや上から力を加えることを意識して組み立てを行いました。			
作業担当者が記入：個別の指導計画に記載する際、個々を参考に担任がまとめる。				

平成〇〇年度 中学部 個別の指導計画

<前期>

中学部 〇年 氏名 〇〇 〇〇		担任名 〇〇 〇〇、〇〇 〇〇	
	重点目標	指導内容・指導の手立て	評価
生 活 単 元 学 習	・木工班の手順が分かり、グループの仲間と協力して作業ができる。	・視覚的な支援を活用し、手順が分かるようにする。 ・グループでの活動にし、仕事をローテーションで分担することでお互いの仕事内容に気付かせるとともに、協力しないと作れない状況に設定する。 ・指示は一つずつ、簡潔にする。	○
	・木工班で挨拶、返事を大きな声です。 ・校外学習でマナーを守り、公共施設を利用することができる。	・木工班の挨拶、返事、報告の仕方を学び、習慣にする。 ・事前学習で正しい利用法について学習する。 ・利用時の決まりを提示する。	◎ ◎
	<特記事項> ・ソーランロックでは教師の手本を見なくても踊れるようになり、教師の声がけで腕を高く挙げることを意識して踊ることができました。 ・木工で使用する機械類の大きな音が怖く耳を塞ぐことが多くありましたが、安全に注意して繰り返し使用することで全く見られなくなりました。椅子作りでは、グループのメンバーと協力して取り組み、ドライバーの先をネジに対して垂直にして打ち込むことや上から力を加えることを意識して組み立てを行いました。		

主体的な社会参加を目指した取り組み

組織的、系統的な支援の取り組み

キーワードは「うり」



一 はじめに

高等部では「作業学習」と「総合的な学習の時間（重複学級は自立活動）」を学校生活の中心に据え、生徒の働く力と意欲を高める支援に取り組んでいる。十九年度からは「総合的な学習の時間」を取り上げ、授業で身に付けた力を進路先に移行させるための支援の在り方について、支援者間や地域社会との連携にも視点を置きながら検証した。その結果、「総合的な学習」のテーマの精選や適切なグループワークを行うことができたが、学習成果を進路先に移行することは課題として残った。そこで、二十一年度からは「作業学習」を中心に、生徒個々が卒業後豊かな生活を送るための支援について探ることとした。

△二年次の実践

1 目的

社会につながる「作業学習」の在り方を探る。

2 内容

- (1) キャリア教育発達段階表(東京都 二〇〇九を活用した授業研究
- (2) 実習先の評価表の検証

3 まとめ

- (1) 『身につけたい力』を明確にし、職員間で共通理解できた。
- (2) 生徒について、「作業学習」と他の学習場面では共通理解が不足だった。
- (3) 得意なところ(うり)に自信を持って卒業・就労できることが必要なことを確認した。

二 研究内容

1 目的

△二年次の実践

「作業学習」と「日常生活の指導」の二つの場面における生徒の課題について職員間の共通理解を図り、組織的、系統的な支援の取り組みを目指す。

2 内容

- (1) 生徒個々の実態を明確にし、職員間で共通理解する(うりカードの作成)
- (2) より良い支援内容・方法を探る。

3 まとめ

- (1) 生徒の良いところ(うり)に職員の視点を転換できたが、「うり」についての職員間の確認が足りなかった
- (2) 研究授業を通して、「うり」を生かした支援が「うり」を伸ばしたり、作ったりすることに広がるが、学校での「うり」が就労後の「うり」になるには限らないことが確認できた。
- (3) 「うりカード」の様式を改良する必要がある

№。(記入コトバ)

(4)「うり」は生徒自身が意識する必要がある。
P158。

三年次の実践

1 目的

生徒の実態について職員間の共通理解を図るとともに、生徒の自己理解をすすめる、「うりを生かした支援」の取り組みを目指す。

2 内容

- (1)「うりカード」の様式改良
- (2)「生徒用うりカード」の作成
- (3)「うり」を生かした授業作り(授業研究)

三 成果と課題

〈成果〉

1 「身につけたい力」について

(1)研究授業をとおして、また実習先からの評価表を検証することで、高等部で「身につけたい力」を明確にできた。
(2)足りない力を補うだけでなく、得意なことを持っていることが就労や進路先に適応するために必要であることを職員間で確認できた。

2 「うりカード」について

(1)生徒の良いところを見る、実態を見直すなどのきっかけになった。
(2)生徒の自己理解をすすめるきっかけになった。

3 授業研究について

(1)より良い支援内容・方法を探ることができた。その中で、各作業班の特色や課題が明らかになった。
(2)「うりを生かした支援」を実践することで、生徒が自主的に作業に取り組み場面が見られた。

〈課題〉

1 「うりカード」は生徒の実態を見直すきっかけや作業班での話し合いの参考にはなったが、記入しただけでは学級と作業班で生徒を共通理解するまでにはいたらなかった。

2 ケース担当者や作業班で、「うり」や「うりカード」についての捉え方が異なった。共通理解が不足だった。

四 具体的な実践

1 「実習先からの声」

前・後期の外部施設での実習の評価を、サービスごとに「特に良いと認められる点」を伸ばした方が良い点」として一覽にまとめ、職員で共通理解を深めた。(資料1)

2 うりカードA(生徒用)

生徒自身が自分のうりを意識できるように、「生徒用うりカード」を三年次から取り入れた。生徒の傾向として自己評価が低く、記入がすすまない場合が多かったが、進路学習の一貫として、担任との話し合いに活用したり、友達からの評価で自分の良さに気づいたりすることがあった。(資料2)

3 うりカードB(職員用)

生徒一人一人の実態を職員間で共通理解するために「うりカード」を作成した。「うり」の部分はケース担当者が記入し、日生、作業の部分は各担当が目標、評価を「うりカード」上でを行い、個別の指導計画に反映させた。(資料3)

資料 1 「実習先からの声」

サービスごとに「一般企業」「就労継続支援A型」「就労継続支援B型」「通所授産」「生活介護、入所等」に分けて、実習の評価をまとめた。
 以下は「就労継続B型」の場合である。

実習先からの声 (就労継続支援B型)		岩手県立前沢明峰支援学校高等部	
実習先 ・ワークジョイかわさき ・コスモスの家 ・供伸園 ・室蓬館 ・白梅の園 ・ワークジョイふじの実 ・あけぼの ・ワークみずさわ ・たけとんぼ(分室) ・方光会 北萩寮 ・ヒットエンドラン ・とばせ園			
項目		実習中の様子	
		特に良いと認められる点(件数)	改めた方が良い点・力を伸ばした方が良い点(件数)
日常生活	生活リズム(時間)	1	4
	食事		
	身だしなみ		
	交通(通勤、通所)	1	2
対人関係	あいさつ、会話(非言語的含む)	5	12
	協調性	3	2
	感情のコントロール	2	2
	意思表示(報告、相談)	3	8
行動・態度・能力	作業意欲	2	1
	ルールの理解	3	4
	持続力(集中)	5	13
	巧緻性(正確性、速度)	4	1
	作業能率の向上		
	危険への対処		
準備・後片付け			
その他の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・作業指示の理解力 7 ・笑顔 1 ・表情よく 1 ・積極性 3 ・効率的に 1 ・素直 1 ・環境に左右されないで 1 ・体力をつける 1 ・様々な作業に対応できる 1 ・仕事に対する意識をもつ(趣味ではない) 1 ・施設内を一人で移動できる 1 ・休憩時間を過ごせる 2 		

うりカード (A)

年 組 氏名 _____

あなたの^よ良いところはどこですか？
あなたの^{とく}得意なことはなんですか？
良いところ、得意なことを<うり>といいます。

^{そつぎ}卒業するとき「わたしのうりは〇〇です」と^{じしん}自信を持っていえるようにしましょう

あなたの<うり>はなんですか。

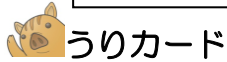
<わたしのうり>

あてっだりがす
せんとくものたむ
あまゲームマリオカートがとくり

^{せんせい}先生はあなたの^{つぎ}うりを次のように^{おも}思っています。

<先生の^{かんが}考えたあなたのうり>

- ・ ^{いながらずに}自分から仕事に！ : 進んで取り組む
- ・ おんがくが好き
- ・ みんなといっしょに体を動かすのが好き



〇年 〇組 氏名 (〇〇〇〇)

ケース担(△△△△)

実 態		うりを視点にした取り組み ~うりを作る 伸ばす 生かす視点で~					
		日常生活の指導			作業(受託サービス班)		
		前 期	評 後 期	前 期	評 後 期	評 後 期	
<p><わたしのうり>..生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりがあって面倒見がよい。 ・笑顔が増えた ・与えられた仕事は最後までやりとげる。 ・農作業・園芸など、土いじりが好き ・友達と仲良く出来る ・読書や音楽を聴くことが好き <p>うりカードA (生徒用)より</p> <p>うりカードA(生徒用)の話し合いの中から。また、生徒指導・進路指導等を通して</p> <p><あなたのうり>..ケース担</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えて行動ができる ・友達への気遣いができる ・自分の意見をしっかり持つことができる ・1つ1つの活動に一生懸命 <p><補いたい力>..ケース担</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション力 ・表情 ・柔軟性 		<p>△</p> <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで係活動や学級の仕事をを行う。 ・必要な時間を考えて行動することができる。 ・体調を考えてトレーニングの周数を決めて走ることができる。 <p><手だて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・模範を示す。指示ではなく、気づきつながら声かけをする。 ・今までの経験でどれくらい時間がかかったかを示す。 ・基本の周数を決め、朝の体調で1周増減をする。 <p>「日常生活の指導」は学級担任またはケース担が記入</p>	<p>○</p> <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで係活動や学級の仕事をを行う。 ・必要な時間を考えて行動することができる。 ・ペース配分を考えてトレーニングを行うことができる。 <p><手だて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・模範を示す。指示ではなく、気づきにつながる声かけをする。 ・現在の時刻、終了時刻、かかる時間の予測を時計で確認する。 ・腕時計で1周にかかる時間を確認し、意識できるようにする。 	<p>△</p> <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声、明るい表情で、あいさつ、質問、報告が出来る。 <p><手立て></p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告、連絡、相談の場面を設定して習慣化する。 ・自分から意識できた時には大いに賞賛し、意欲につなげる。 <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業目標(作業量、スピード)を意識して活動に取り組む。 <p><手立て></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人目標の発表の際、活動内容を十分に意識しているか確認する。 ・作業環境の整理に気を配る声かけをする。 	<p>○</p> <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声、明るい表情で、あいさつ、質問、報告が出来る。 <p><手立て></p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告、連絡、相談の場面を設定して習慣化する。 ・自分から意識できた時には大いに賞賛し、意欲につなげる。 <p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・役割を意識して、まわりの動きに注意を払いながら作業能率を考えて作業することができる。 <p><手だて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体の作業進度、ノルマを伝え、自分の動き方を考える場を設定する。 	<p>△</p> <p><特記事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分では気づいていても周りの人が動くことを待っていることがあるが、今までの経験からイメージがはっきりしている活動では次のことまで考えて積極的に活動することができた。 ・終了時間を確認することで、経験のある活動については終わりの時間を考えて活動スピードを調整することができつつある。 ・歩かずにゆっくりでも走ることを意識して周りに左右されることなく、真剣に取り組むことができた。 	<p>△</p> <p><特記事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノルマを意識しながらの作業では、負担に感じてしまうのか、なかなか思うように量・スピードの向上はならなかったが、手順を理解して効率的に作業に取り組めるように、道具の配置や準備などの工夫が見られるようになってきた。
		<p><記入の順番></p> <ol style="list-style-type: none"> ① 実態(4月) ② 前期日生 目標(4月) ③ 前期作業 目標(5月) ④ 前期日生 評価(8月) ⑤ 前期作業 評価(8月) <p>*後期も順番は同じ</p>					

「作業」は作業班で記入。

卒業後の豊かな生活をめざした支援について

～地域生活につながる支援のあり方～

一 はじめに

寄宿舍では、前研究で学部・家庭・関係機関が「一緒に取り組んでいく」ことの重要性を明らかにし、「複数担当制」を取り入れ、ケースによって柔軟な対応や工夫を可能にするといった「連携」をテーマとして研究を推進してきた。しかし、一人一人に合わせた支援を行うという根本的な課題が解決されないまま残っていた。

そこで本研究では、寄宿舍経営方針にある「舎生の個々のニーズを把握し、個性と能力を発揮できる支援に努める」という、寄宿舍の支援の原点を再確認するとともに、より良い支援を探ることを目的とした。

二 研究内容

問題点として挙げられたのは、①舎生の生

活環境の過密化、②職員の多忙化、③舎生の実態やニーズの把握方法であった。そこで、

ハード面「支援の枠組み」とソフト面「具体的な支援の方法」について見直すことにした。

＜一年次の実践＞

ハード面「支援の枠組み」について

1 目的

環境的(体制的)不具合問題点①と②の改善を行い、支援を行う上でより良い環境を目指す。

2 内容

(1) 舎生の生活環境(日課・行事・舎生会組織の運営)の見直し

(2) 職員体制(複数担当制・分掌業務・勤務シフト・諸会議の運営)の見直し(資料1)

＜二年次の実践＞

ソフト面「具体的な支援の方法」について

1 目的

支援的不具合問題点③の改善を行い、能力や必要性に応じた支援を目指す。

2 内容

(1) 実態やニーズの「把握の仕方」「支援への活かし方」として、ICF関連図を取り入れた実態把握を行った。(資料2)

(2) 一年次に行った環境(体制)の改善を実践し、実生活(実社会)で通用する力をつけるための支援の充実を図った。

＜三年次の実践＞

ソフト面「具体的な支援の方法」について

1 目的

ICF関連図を用いた実態把握を、個別の指導計画の作成に、より良く活かす方法を探る。

2 内容

年度始めと年度終わりに行っていった実態把握を、後期が始まる前にも行い、半期での

舎生の変化をより捉えながら、個別の指導計画の充実と舎生の共通理解の充実を図ることとした。(資料3)

三 成果と課題

ハード面「支援の枠組み」について

1 成果

舎生の生活環境の見直しと、職員体制の見直しによって、舎生個人での活動や個別の支援の時間を確保することが可能になった。個に応じた支援の充実に繋がった。

2 課題

複数担任制について、職員間で捉え方や考え方が異なっている場合があった。共通理解を図った上で運用する必要がある。

ソフト面「具体的な支援の方法」について

1 成果

(1)ICF関連図を取り入れるにあたり、可能な限り本人の希望も聞き取ることとしたことで舎生自身が課題や目標を自覚できた。

(2)ICF関連図を取り入れたことで、家庭環境へ目を向けやすくなり、連絡や連

携の仕方を工夫することができるようになった。

(3)学習会等を、棟ごとや実態に応じた形での取り組みとしたことで、個々に必要な支援が充実した。

(4)半期での実態の見直しにより、舎生をより深く把握し、前期に曖昧だった部分や半期で見られた変化を改めて確認することが可能になった。

(5)舎生の実態を共有、共通理解し意見を出すのに役立った。

2 課題

(1)個別の指導計画を作成する際、実態把握のどの部分を反映させていくのかを、職員間で確認し、意識していく必要がある。

(2)個別の指導計画を作成する際、実態把握で見られた「変化」に合わせた目標と手立てを設定することで、職員間の共通理解が有効に行えるように工夫していく必要がある。

四 まとめ

1 支援の手立てについて、舎生の持っている力と困難さに目を向けた上で「どのような力」を「どの場面」で「どのように」ということを具体的にすることで、舎生が困ることなく、どの支援者も迷わず、同じように関わられるようになることが望ましい。

2 「自立」のあり方は一人一人違ってくる。寄宿舎での生活と経験をキャリア発達に繋げていくためには、個々の実態を正しく把握し、支援の在り方も一人一人に合わせて考えられ実践される必要がある。実態把握と個別の指導計画は書いて終わりではなく、活用されて初めて意味がある。寄宿舎の支援の原点を再確認した上で、今後の支援の向上を目指したい。

キーワードは
「実態把握」
「支援の充実」



資料1 ハード面「支援の枠組み」についての変更点

①舎生の生活環境の見直しについて

→日課の見直し

- ・組織活動の時間の固定化

(原則19:00～19:30)

- ・朝のラジオ体操の廃止

→行事の精選

- ・入舎式、退舎式、舎生会行事(年2回)、代表者会議、避難訓練(4回分)、自転車実地テストの廃止

- ・各学習会を棟単位での活動に移行

- ・季節行事を棟単位での活動に移行

②職員体制の見直しについて

→複数担当制の検証

- ・主担当を導入し学部との連携を密にする。

- ・複数担当制の共通理解を図る。

→分掌業務の見直し

- ・原則一人一係制

→勤務シフトの見直し

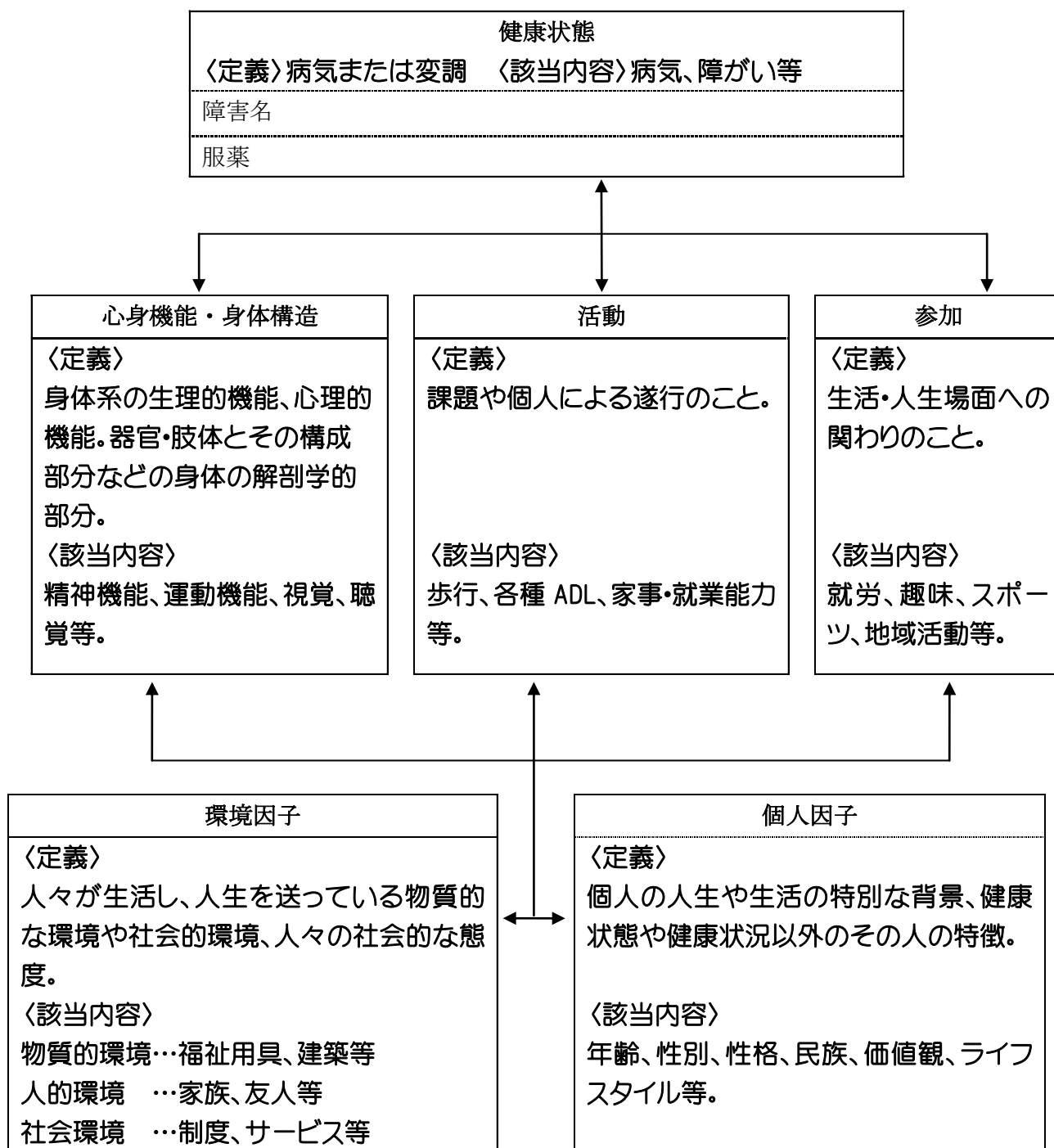
- ・遅番の勤務時間を生徒の日課に合わせるため11:30～20:00に変更

- ・宿直明けの勤務時間を職員間の連携時間を確保するため6:00～14:30に変更

2

平成24年度 実態把握

舎室名 _____ 氏名 () _____ 舎室担当 _____



本人の希望	
保護者の希望	
担当の希望	

資料3 個別の指導計画の作成

資料3 個別の指導計画の作成

平成24年度 寄宿舎個別の指導計画

舎室名 _____ 氏名 _____ () _____ 舎室担当 _____

年間指導目標	
本人の希望	
保護者の希望	【現在】 【将来】

具体的目標・支援内容

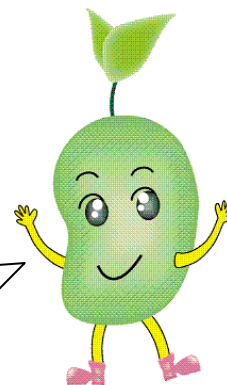
領域	内 容		評価
日常生活	具体的目標		
	支援方法	<div style="border: 2px solid red; padding: 5px;"> <p>※一人ひとりのニーズに応じた生活力の育成</p> <p>内容</p> <p>食事、睡眠、排泄、洗面、入浴、洗濯、衣服の着脱、整理整頓、清掃、日課、学習</p> <p style="text-align: right;">に関すること</p> </div>	
	経過		
社会生活	具体的目標	<div style="border: 2px solid red; padding: 5px;"> <p>※社会生活を営む力の育成</p> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力（言語指導、対人関係づくり、交際など） ・自治活動（自治活動、文化活動、クラブ活動、同好会活動など） ・遊びおよび余暇活動（集団、個人） ・社会体験（経済観念、労働、買い物学習、公共施設や交通機関の利用、登下校、帰省、通院、社会福祉の理解と利用連携など） <p style="text-align: right;">に関すること</p> </div>	
	支援方法		
	経過		
健康・安全	具体的目標	<div style="border: 2px solid red; padding: 5px;"> <p>※生命を守る力の育成</p> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康管理（意識づくり、服装、薬の管理、病状理解、病状報告、喫煙、飲酒など） ・安全（移動、歩行指導、避難訓練、交通指導、防犯、危険物、環境の認知など） ・心理的安定（ピアカウンセリング） ・性教育 ・環境教育 ・医療機関との連携 <p style="text-align: right;">に関すること</p> </div>	
	支援方法		
	経過		
所見			

このコラムは、この一年間、実践研究部の情報誌に寄せられたものを集めたものです。

「つなぐ」をキーワードに、投稿者の思いや気が付いたことが綴られています。

皆さんにとって「つなぐ」という言葉は、どんな意味をもっているのでしょうか？

ご意見ご感想がありましたら、前沢明峰支援学校までドシドシお寄せ下さい。



リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



「つなぐ」をキーワードに取り組んできた校内研究も最終年となりました。このコーナーでは、実践研究部員の身の回りにある「つなぐ」に目を向けたコラムをお届けしたいと思います。それでは、始まり始まり。

人とのつながりを深める手段として、酒を酌み交わすというのがあると思うのですが、先日の某新聞に気になる記事が……。 (以下記事より抜粋)

職場の人間関係を深める「飲みニケーション」。今や死語、と決めつけるのはまだ早い。「職場の潤滑油」として、費用を負担してまで社員に推奨する企業が増え、若手社員らに支持されている。

と、ここまで読むとやっぱり大事！と思われるのですが、一方で「飲みニケーション」を続けてきた40代以上が体を壊しているとの警鐘も……。

何事もほどほどが大事ということでしょうか。

(鎌田和茂)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



中学校時代、私の通っていた学校には校内陸上大会という全校行事がありました。全員が何かしらの陸上種目にエントリーし記録を競うのですが、さらにその種目にプラスして、クラス対抗全員リレーという競技がありました。

運動が大の苦手だった私は、走る距離が一番短いからという理由で100メートル走にエントリー。しかし、全員リレーはそんなサボり心は許されず、がんばって走った記憶があります。昼休みや放課後にクラス全員で自主的に練習したりと、とにかくみんなで燃えていて、まさに結束力！本番の勝敗は記憶が定かではないのですが、クラスのためにみんなでつないでみんなで応援して、とみんなで一体となりとても感動的だったのを覚えています。みんなが同じ目標をもっていたのかなと思います。

目標をもつて大事だな～と日々様々な場面で思います。「〇〇のために」という気持ちがあればがんばれる！そして、その思いが重なれば結束力も生まれる！とりあえず、私は小さな目標から！

(の)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



「人はひとりでは生きていけない」若者の歌によくでてきますね。

「学校の仕事はひとりではできない」・言うまでもなく・・・

高等部生徒93名、職員44名、学級数は12。教育課程上メインとなる作業学習の班は7。「担任です！」とは言ったものの、学級を離れ、作業班や学年の先生方にお世話になることの方が多いのです。

そこで、学級担任が何を考え、作業班ではどんなことを指導しているのか、この大所帯をつなぐために「うりカード」なるものが登場しました。2年目の今年、生徒自身にもうりを意識させるため、生徒のうりカードも新たに始めました。

生徒のことをもっと知りたい。知って欲しい。

どんな支援を受けているの？どんな支援が良いの？毎日そんな話ができればいいけど、皆さんとても忙しい。生徒と職員、作業班と学級、職員と職員をつなぐ細くて赤い糸にうりカードはなっただけでしょうか？

先生方の仕事を増やしたただけだったでしょうか？

人と人をつなぐのはもちろん人です・言うまでもなく・・・

(にゃ)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



私は娘と誕生日が同じです。なので、いつも家族でする誕生日会は娘が主役で私は付け足しのようなもの…悲しい。よくその話をすると「すごいねえ！計画したの？」なんて言われますが、全くそんなことはありません。それから、さらに私の母も誕生日が同じです。親子三代同じ誕生日！しかもみな第一子（長女）、そして血液型も同じB型…なんて偶然&奇跡でしょう！！

結婚をし、子どもができ、家族が広がり…命を「つなぐ」、家族を「つなぐ」って何気ないことですが、つながりに意味を見いだしたり、つながることの大切さを思い直したりすると改めてその不思議さ、すごさを思い知らされます。

両親、家族、子ども、友達、職場の同僚、児童生徒、保護者…私の周りは会うべくして出会ったたくさんの人たちがいます。その周りのみんなとのつながりを大事にして日々感謝しながら過ごしていきたいと思っています。

私の孫も同じ誕生日だといいな！あと15年後？20年後？楽しみ〇^

(担当：イカ)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



最近、私がつないだものと言えば、安比リレーマラソンのたすき。

できれば・・・休みの日は家に居たい。苦しい思いはしたくない。長距離走は苦手だ。実際に安比の坂を走れば、歩いている人にも追い越される。

そんな私が、ここ数年、たすきを「つなぐ」ことができていく理由。。。。。

☆早く走れなくても、みんなが優しくしてくれる。

☆頑張れって、みんなが応援してくれる（見ず知らずの人も応援してくれる）。☆タスキさえ繋げば、あとは早い人がフォローしてくれる。

☆一生懸命な人と一緒に一生懸命頑張ることって気持ちいい。

個性を認めてもらえる、応援してもらえる、助け合える、目指すところが同じ仲間がいる、こんな環境はとても気持ち良く、いつも以上に頑張れる。

人生はマラソンのようなものだとよく例えられるが、この、人と人が繋がっている感覚。。。。。安比リレーマラソンって、人生の縮図みたいかも(^ ^)と、帰りの車の中で原稿を考えながら思った。

この、「つながる」感覚、みなさんも味わってみませんか？とても楽しいので。

来年の開催は、おそらく9月8日（日）です

(みちこ)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



わたしがイメージする「つなぐ」はやっぱり野球ですねえ。野球以外でも「つなぐ」場面はたくさんあると思いますが、野球が生活の一部なので書かせていただきます。少しお付き合いください。

野球は数ある球技の中でもボールではなく人（選手）がホームベースを踏むことで点が入るという面白いスポーツです。そのため点を取るためにいろんな作戦を使い選手を先の塁へ進めます。そこで意識するのが「つなぐ」です。点を取るために粘って塁に出る→次の塁へ送る→送った選手をホームへ返す。この一連の動きの中に「チームのために…」「勝利のために…」「応援してくれる人のために…」たくさんの思いが集まり「つなぐ」という気持ちが爆発します。一人でも「つなぐ」気持ちが無いと…チームとしてのつながりは保てません。

野球を例に出しましたが教育現場でも同じだと思います。私たち教職員がいろんな知識・思いをぶつけ合い、全員でつなげて、一つの目標に向かい共通理解のもとで取り組んでいくのが大事なのではと思います。子ども達の将来を切り拓くために私たちができることをみんなでつないでいきましょう！

私たちは一つのチーム！！～one for all all for one～

(T-89)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



つなぐ、のお題をもらい・・・私がつないでいきたいことってなんだろう、私ができるつないでいくことって・・・と考えた。我が家でやっていることと言えば、「いただきます」「ごちそうさま」「ごめんなさい」「ありがとう」の挨拶かな？それはごく普通でそしてちょっと古いようで、でも正しくて気持ちが良くてかっこいい・・・。気に入ってます^-^-

古い（＝昔）といえば私が子供の頃は、茶碗のご飯粒を一粒も残さないように食べなさい、お百姓さんが一生懸命作ったお米なんだ、食べないと目がつぶれるよ、なんて言われ頑張っていました。あとは朝起きたら縁側掃除、と嫌々ながらもやっていました。今に至っては・・・つながっていることもあるしそうでないことも。

そういえば、秋彼岸に親戚の家を訪ねた時、「疲れないように、やんべにやってや。」「やんべ（適当に）っていい言葉だっちゃーね！あははは！」という会話になり、とてもほっこりしました。こんな人を癒す言葉もつなげていくといいかもしれません。

(担当：ほ)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



私は、最近電話での「つながり」によって不快な症状の解消ができました。ある夜、急に背中にひどい湿疹ができ、痒みと痛さで次の日まで待てなかったので、病院に電話をしました。受付をしてくださった方が、丁寧に症状を聞き取ってください、ほんの数分間に看護師や医師にも連絡を取ってくださいました。「皮膚科医はいないけれど、外科医がいるのでもし宜しければ診てもらえますか？」と言われ、「専門が違う外科医だけど、親切な対応だしいいかあ〜。」と思い病院に行きました。診察の際には、医師が相談し合ってより良い処方ができるようにとのことで2人の医師と看護師に診てもらいました。「原因は虫だ！」と医師に即答され、軟膏と飲み薬をもらって不快な症状を解消できました。

今回の件で、受付の方の迅速な対応と、病院側の患者をより良くするための環境づくり、親切な対応が私にとって安心でき、とても有りがたく思いました。同じつなぎ方でも、できるだけ早く、親切で、心が安心できるような環境づくりが良いなと思いました。

(担当：青い梅)

リレーコラム 「つなぐ」ために必要なこと



みなさん、年賀状のご準備はもう、お済みですか？…

今年の初めにいただいた年賀状を読み返し、1年に1度のご挨拶になってしまっている方を含め、それぞれの方とのかつての関わりを思い出しながら、また新たな絆をつくむもの…。自らの1年を振り返りつつ、次の1年に思いをはせるもの…。この時期、年賀状は、そんな絆や思いを年をまたいで「つなぐ」有り難く素敵なアイテムですね。

誠に残念ながら、今年は喪中ハガキを出すことになった私……。命の灯火がつきたことの報告ではありますが、改めてかつての、そして現在のおつきあいに感謝しつつ、命と思いを受け継ぐことのお知らせでもあるのだと感じ、すべての宛名を手書きしました。

「つなぐ」…過去の自分・これからの自分、かつての絆・これからの絆、逝く命・受け継ぐ命……そこには必ず“思い”があります。様々なつながりが、あなたの、誰かの支えになりますように……そして、新しい年へ……素敵な“思い”がつながりますように……。

(担当：Piano)

あとがき～キーワード「つなぐ」をめぐる～

副校長 佐々木敬二

実践研究部では、今回の研究のキーワードを「つなぐ」としました。この「つなぐ」はとても現代的な課題だと私は思います。

現代社会は、格差社会や分断社会などのことばで言い表されるとおり、伝統社会では当たり前にあった人と人との紐帯が断絶し、一人一人がアトム化（個別化、孤立化）する傾向が強まっています。教育をめぐるさまざまな問題もこの傾向と無縁ではありません。経済社会における新自由主義的発想、生活空間のコンビニ化、ネット空間における擬似的連帯、これらの現代社会を特徴づける不可逆的な流れは、人間のアトム化をいっそう推し進めています。近代ヨーロッパの黎明期において、新たな産業文明がもたらした人間のアトム化と流動化は、人々の身体と精神をむしばみ、さまざまな社会問題を引き起こしました。現代社会のさまざまな問題は、近代の新たな産業文明の中にすでにその萌芽があったのです。

近代ヨーロッパの産業文明のベースには科学主義があります。この科学主義の特徴は「分析と総合」と言われる方法です。この方法は「二分法」をベースとしています。まず分析の対象範囲を限定し、その中で、混沌とした事象を「多／少」「大／小」「正／負」「強／弱」などの基準でどんどん二分していく。最小（と思われる）単位まで分割した後、共通する特徴を抽出して事象の奥に潜む法則性を導き出す。極めておおざっぱな説明ですが、これが「分析と総合」の方法論です。簡単に言えば、学校で習う理科実験の方法です。

科学主義は物質世界の秩序を解明する上では極めて有効な方法です。ところが、物質世界とは原理の異なる精神世界や人間社会にこの科学主義を適用しようとしたところから、さまざまな問題が生まれてきた、というのが多くの現代思想家の共通認識です。この科学主義を乗り越える方法として、ハイデッガーの思想があります。正確に理解しているかどうか心許ないのですが、少し紹介します。たとえば、物質としてのハンマーと実際に人が使っているハンマーとは意味合いが全く異なる。物質としてのハンマーは物理化学的方法によって分析できるが、使っている人にとって最も重要なのは物理化学的特徴よりもその「使い勝手」であり、「使い勝手」は物理化学的分析によってのみ解明することは不可能である。この「使い勝手」を一般化すると、「配慮」（または「気配り」）ということになる。社会の中に存在するあらゆるモノ・コトは、それに関わる人々の「配慮」が集まってできた束である。と、こんなところでしょうか。

長々と回り道をしましたが、私の言いたいことは、教育という営みはまさにこの「配慮の束」だということです。子どもについて言うと、子ども本人と子どもに関わるすべての人々の思いや願いが束となり、自ずと形づくられてくるものが、その子どもにとっての本来の「育ちの姿」なのだと思います。

職業生活において、とかく自分の守備範囲から出ようとしない傾向が我々にはあります。人の仕事に口出しをしない、自分の仕事に口出しをさせない。これを私は「タコツボ化」と呼びます。「タコツボ」に入ったままでは質の高い教育はできません。子どもを中心として人々の思いや願いをつなぎ、一つの束にしていくことによって教育の質は飛躍的に高まります。その意味で、「つなぐ」というキーワードは今回の研究で終わりということではなく、今後も本校の教育のバックボーンとして大切にしていきたいキーワードではないでしょうか。